考古学の先駆者 赤星直忠博士の軌跡(12)

― 通称「赤星ノート」の古墳時代資料の紹介 ―

古墳時代研究プロジェクトチーム

例　　言

・通称「赤星ノート」の神奈川県埋蔵文化財センター保管分の古墳時代に関係する項目を抜粋し、報告・掲載していくものである。

・研究紀要第20号には横須賀市域にあたる03018・03052・03067・03111番を掲載している。

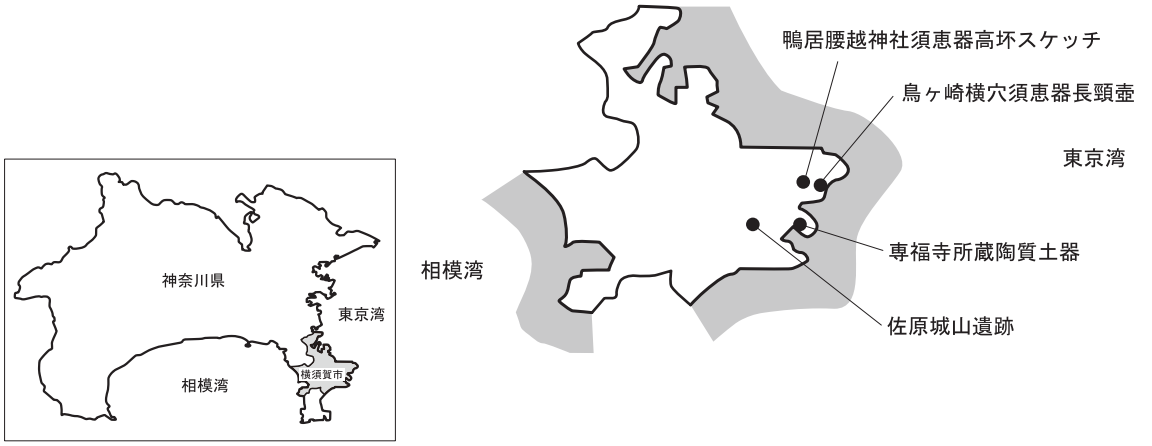
・番号は埋蔵文化財センター年報14～19に記載されている番号に対応している。

・執筆分担は横須賀市03018番：岸本泰緒子、03052番：吉澤　健、03067番：長澤保崇、03111番：長友　信が行った。

・各記述は「１．赤星ノートの内容」「２．記載資料の整理」の２つに大きく分け、１．の細目は［調査(踏査)年月］［資料保管場所］［記載内容概略］とし、２．は［(遺跡及び)遺物(遺構)概要］［掲載図書］［掲載図書概略］［小結］などとし、資料に応じ該当部分を記載した。

・挿図や図版は基本的に作図者のタッチを重視し、赤星氏の図、もしくは実測者の図をそのまま掲載し、写真に関しても同様である。

・「赤星ノート」は遺構図では略測図に寸法の数字が記載されるものが多く、遺物図は基本的に原寸に近い図ではあるが、なかにはそれから外れるものも存在するため、縮尺は任意掲載のものが多い。



第１図　対象遺跡及び遺物位置図　　凡例 ● 遺跡及び遺物位置

年報番号　横須賀市03018　専福寺所蔵陶質土器　横須賀市東浦賀

１．赤星ノートの内容

［調査（踏査）年月］

実測図には記載がない。ただし同封筒内の別図には1977（昭和52）年２月20日の日付があり、本実測図についても同時期かと推測される。この実測図は『横須賀市文化財総合調査報告書』作成時の調査によるものと考えられ、報告書の刊行が1981（昭和56）年３月31日であることを勘案しても、調査時期がおよそその前後であることは間違いないであろう。

［資料保管場所］　専福寺（横須賀市東浦賀２丁目所在）

［記載内容概略］

横須賀市東浦和２丁目に所在する専福寺所蔵陶質土器高坏の実測図である。資料が収められている封筒は静岡大学理学部から県立博物館に宛てられたもので、料金後納郵便のため日付は入っていない。封筒裏には「東浦賀専福寺」とメモがある。封筒内には今回報告する「新羅焼高杯　浦賀専福寺蔵」実測図の他に、昭和52年２月20日付け「東浦賀専福寺」蔵「ガンガン」に関する略図、陶器壷（現代）実測図の３点が入っている。実測図はＢ５判方眼紙に18.2×9.6cmの白紙を継ぎ足したものに描かれている。複数の筆跡による書き込みがあり、「新羅焼　高杯　浦賀専福寺蔵」「もと朝鮮にいた伝道師の友人から専福寺住職（成田光俊氏）がもらいうけたものという」と記載がある。また遺物そのものの観察所見として、胎土・焼成について「石英・長石多く含む　焼成良好・堅緻」、坏口縁部外面について「やや表面が荒い」、脚部透窓について「切りが鋭い」、「高杯　高13.1cm　口径11.5cm　脚高8.4cm　蓋口径13.2cm　蓋高5.2cm　蓋上に二段に放射状に櫛文がある」「原寸」という書き込みがある。また実測図には「玉林美男測図」とある。昭和50年代におこなわれた横須賀市教育委員会による文化財調査において、調査団団長および考古部門主任調査員が赤星氏であり、玉林氏（鎌倉市教育委員会）は調査員を務めていた。

２．掲載資料の整理

［遺構・遺物概要］

実測図に描かれているのは、蓋付の二段交互透窓高坏である。高坏は口径11.5cm、高さ13.1cm、脚部高8.4cm、脚部の底部径9.0cmで、断面は直線的に広がり裁頭Ａ字形を呈す。坏部の深さは4.5cm、器厚は0.2～0.6cmで、蓋受け部から口縁にかけてやや内傾し、坏身はあまり膨らまず、なだらかに底部にむかう。脚部には２段の透窓があり、上段透孔は高さ約３cmの長方形、下段透孔は高さ約2.5cm、上部幅1.3cm、下部幅2.1cmの台形を呈す。２段の透窓の間には幅１cm程のかまぼこ状凸帯が付く。脚部は坏部より分厚く、厚さは0.4～0.6cm。透窓の数は明記されていないが、実測図を見る限りでは上段と下段に交互に透窓が穿たれるタイプであり、上段には少なくとも５個の透窓の表現が見られる。蓋は口径13.2cm、高さ5.2cmで、径3.1cmのつまみが付く。つまみ部分には透かしはない。蓋上には２段に放射状の集線文が施されている。また透窓部の「切りが鋭い」という観察所見および僅かに歪んだ曲線を描く透窓部の形状からは、針金を用いた切り抜きの技法が想起される。胎土は「石英・長石を多く含む」、「焼成良好・堅徴」とある。

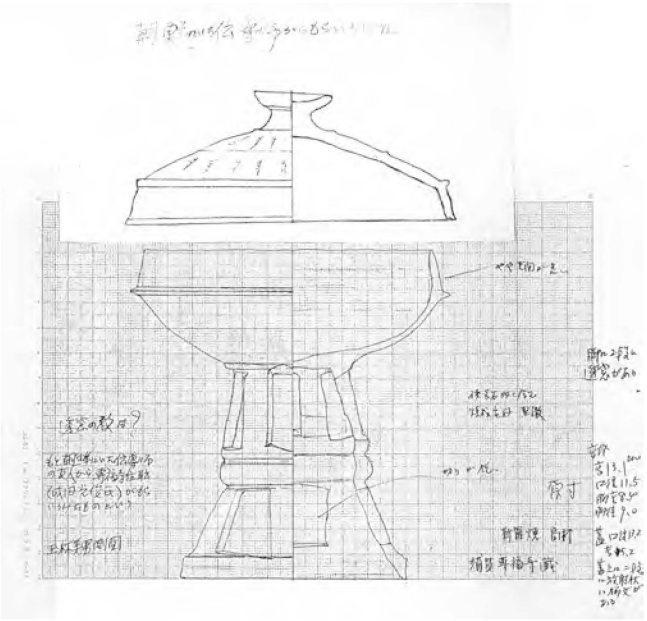
上記特徴と観察所見から、本実測図に描かれているのは新羅産陶質土器の蓋付二段透窓高坏であると考えられる。国内古墳時代遺跡出土品である可能性はゼロではないが、おそらくは実測図にメモ書きのある通り、近年持ち込まれたものであろう。

[掲載図書]

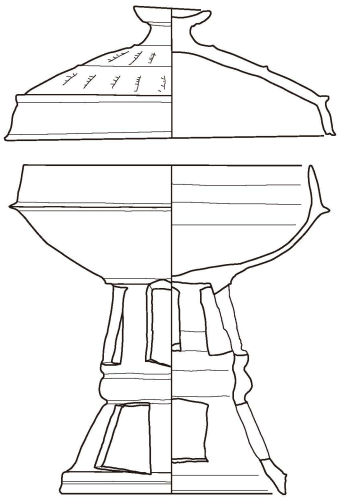
横須賀市教育委員会編1981『横須賀市文化財総合調査報告書　第1集　―浦賀地区―』p. 386

[掲載図書概略]

遺物概要に関する４行の記述があるが、実測図や写真は掲載されていない。



第２図　実測図



第３図　実測図トレース図（Ｓ＝1/3）

[小結]

本資料は、二段の透窓、口縁部がやや内傾する点、脚部断面形態、蓋に施された集線紋などの型式的特徴（金斗喆 2014など）からみると、慶州・皇南大塚南墳出土高坏に類似する、新羅様式中期的な様相をもつ製品であるといえる。皇南大塚は慶州の古墳群にある高さ20m、直径70m以上の大型墳墓である。２基が連接した瓢形墳で、うち南墳が先に作られ、被葬者は男性で、王陵と推定されている。しかし現在においても新羅古墳の編年は諸説並立している状況で、したがって皇南大塚古墳についても年代観は様々であり、被葬者の特定には至っていない。皇南大塚南墳では3134点もの土器が出土し、高坏だけでも主槨で21点、副槨で1292点が出土しており、またそれらがごく短期間に作られたと考えられている（金龍星 2007）。上述のように皇南大塚南墳の年代観にはばらつきがあり、5 世紀前半あるいは 4 世紀に上るとする研究者もいるが、5 世紀第 3 四半期（金龍星 2007、金斗喆 2014）とする意見もある。よって本資料に関する所見としても、型式的に皇南大塚南墳出土高坏に近いという以上のことはいえず、おおよそ 5 世紀代に新羅地域、おそらくは慶州付近で作られた製品であろうという推測に留めることにする。

なお今回の資料調査にあたり、玉林美男氏（鎌倉市教育委員会）、川島裕毅氏（横須賀市教育委員会）、酒井清治先生（駒澤大学）にご協力・ご教示をいただきました。記して感謝申し上げます。　（岸本）

参考文献

金龍星　2007「新羅古墳の年代観-皇南大塚南墳を中心として-」『日韓古墳・三国時代の年代観（Ⅱ）』釜山大学校博物館
金斗喆　2014「皇南大塚南墳と新羅古墳の編年」『古文化談叢』第72集
藤井和夫　1979「慶州古新羅古墳編年試案―出土新羅土器を中心として―」『神奈川考古』第 6 号神奈川考古同人会

年報番号　横須賀市03052　鳥ヶ崎横穴　須恵器長頸壺

１．赤星ノートの内容

［調査（踏査）年月］

不明

［資料保管場所］

赤星直忠博士文化財資料館

［資料概略］

資料は西郊民俗談話会から神奈川県立博物館に送られた封筒に納められており、封筒には「横須賀写真」と筆書きされている。封筒には横須賀市内の文化財や発掘現場を撮影した複数の写真が収められており、本資料はそのうちの一枚である（本資料には撮影年月日は記載されていないが、他の写真には1968（昭和43）年に撮影されたという記載がある）（**写真１**）。

撮影されている遺物は須恵器の長頸壺１点で、黒い紙を背景にしてカラーで撮影されている。写真からはその大きさや撮影場所などの情報は不明である。本資料が貼られている台紙には赤星氏による「横須賀市鳥ヶ崎横穴出土」のキャプションがあるが、鳥ヶ崎横穴墓群のどの横穴墓に帰属するものか、といった情報の記載は見られない。

２．記載資料の整理

［遺跡・遺物概要］

撮影されている遺物は須恵器の高台付長頸壺である。写真からはこの長頸壺についての具体的な情報は分からないが、横須賀市が2010年に刊行した『新横須賀市史　別編　考古』にはこの長頸壺が掲載されている（**第４図**は『新横須賀市史　別編　考古』に掲載された図を筆者が一部修正したもの）。

轆轤成形で、法量は口径12.4㎝、底径8.3㎝、胴部最大径16.1㎝、器高26㎝を測る。口唇部は約２／３を欠くが、ほぼ完形である。形状を見ると口縁は緩やかに広がり、頸部は中半まではほぼ垂直に立ち上がっている。胴部は肩がやや丸みを持って張り、下部は緩やかに丸みを帯びて底部に至っている。底部はやや膨らみ、高台が付いている。口唇部から胴部にかけては外面に自然釉が厚くかかっており、一部は高温のため発泡してしまっている。内面にも頸部まで自然釉が付着し、外面肩部には別個体の須恵器甕片が釉着している。湖西窯産で、７世紀後半から８世紀前葉に年代づけられるものである。

写真が貼られている台紙には「鳥ヶ崎横穴」出土とのキャプションがあり、長頸壺底面にも「神奈川県三浦郡浦賀町鳥ヶ崎」との注記がある。鳥ヶ崎横穴墓群は大正11（1922）年に土取り工事の最中に発見された、横須賀市鴨居２丁目に所在する東京湾岸最大規模の横穴墓群であり、６世紀末葉から８世紀前葉頃に年代づけられる約60基の横穴墓が構築されていたとされる。丘陵東側の横穴墓群は大正期の土取工事によって消滅し、現在では南斜面の横穴墓群が一部残るのみであるが、大正11（1922）年から昭和42（1967）年までに赤星氏らによって４回に亘る調査が実施され、15基の横穴が発掘調査された。出土した遺物は東京国立博物館、横須賀市自然・人文博物館、赤星直忠博士文化財資料館に保管されているが、ほとんどはその帰属が不明である。

［掲載図書］

横須賀市　2010 『新横須賀市史 別編 考古』横須賀市

[掲載図書概要]

2010年刊行の横須賀市史である。鳥ヶ崎横穴墓群の項目に「詳細は不明であるが、鳥ヶ崎周辺出土であることから本横穴墓群の支群である可能性が考えられる」浄地原横穴墓群の遺物が紹介されている。これらの遺物は横須賀市自然・人文博物館に収蔵され、「浄地原横穴」の注記がある。市史の中では本資料の長頸壺もこの横穴墓に帰属する遺物として紹介されているが、この長頸壺は赤星直忠博士文化財資料館に収蔵されており、また注記にも「鳥ヶ崎横穴墓」とあるのみで浄地原の記述はないため、詳細は不明である。

また、この市史に掲載されている本資料の図には自然釉などの情報がないが、これは市史編纂時にトレースし忘れただけのようである。

[小結]

本資料は７世紀後半から８世紀前葉の須恵器長頸壺であり、その年代から鳥ヶ崎横穴墓群でも追葬、ないしは最終段階の横穴墓帰属のものと考えられるが、詳細については不明であった。遺物は黒紙を敷いて撮影されていることから、報告等に掲載された可能性はあるが、管見の及ぶ限りこの写真そのものが掲載された文献は見当たらなかった。

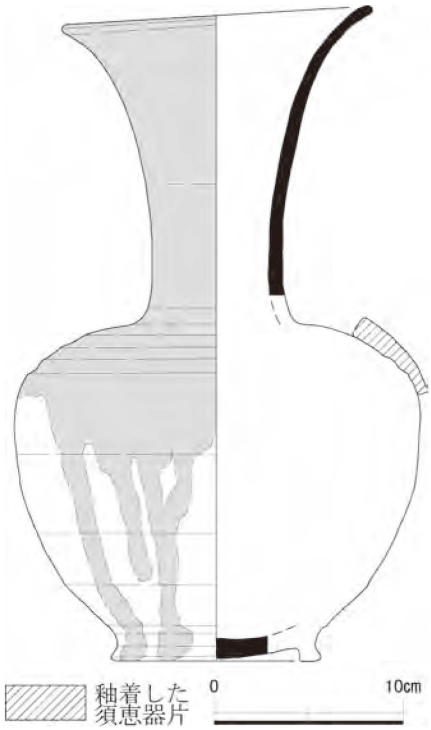
なお、本調査では稲村繁氏（横須賀市自然・人文博物館）のご教示・ご協力を得ましたことを申し添えます。文末ではありますが御礼申し上げます。

（吉澤）

引用・参考文献

赤星直忠　1924a　「鴨居洞穴の発掘」『考古學雑誌』第14巻第12号　日本考古学会
赤星直忠　1924b　「其後の鴨居洞穴の発見遺物」『考古學雑誌』第14巻第13号　日本考古学会
赤星直忠　1924c　「相州浦賀町鴨居の洞穴」『考古學雑誌』第14巻第13号　日本考古学会
赤星直忠　1967　「横須賀市鳥ヶ崎横穴群」『横須賀考古学会年報』第12冊　横須賀考古学会
横須賀市　2010　『新横須賀市史 別編 考古』横須賀市

写真１　実測図



第４図　須恵器長頸壺
（『新横須賀市史　別編　考古』）p. 419
図38-8：5筆者一部修正

年報番号　横須賀市03067　鴨居腰越神社須恵器高坏スケッチ　横須賀市腰越

１．赤星ノートの内容

［調査（踏査）年月日］

資料および収められていた封筒には日付の記載はなく、資料に関する年月は定かではない。

［資料保管場所］

神奈川県立歴史博物館

［資料概略］

Ｂ5用紙に描かれた須恵器高坏の実測図。余白に「須恵器」「鴨居腰越の社内」「赤星採集」「写真出土場所表示なし」「横須賀市鴨居のお宮出土」「県博物館蔵」「口径12.5高さ11.2脚径9.2」と記載されている（**第６図**）。

２．記載資料の整理

［記載内容の概要］

資料にみえる「腰越」の地名は現在の住居表示には残らないが、その由来は鴨居港方面から観音寺（現在焼失）があった亀崎半島の麓（腰）を越えたところとされ、腰越一帯の谷戸・山裾には小さな社が点在するものの「腰越神社」と称されるものはなく、これら社の発掘記録や地区内における須恵器高坏の採取記録も見当たらない。また「鴨居のお宮」に該当する記録には、鴨居港に鎮座する鴨居八幡神社の境内を赤星氏が1950（昭和25）年に調査した古墳後期の貝塚があるが（赤星 1955）、報告される出土遺物のなかに須恵器高坏は見受けられない。

「県博物館蔵」との記載から神奈川県立歴史博物館に問い合わせた結果、本資料と器形・法量の一致する須恵器高坏が収蔵されていた（**写真２**）。受け入れ年月日は1965年３月20日。出土地は横須賀市鴨居で、「鴨居横穴遺跡」の記載を２本線で消し、横に「鳥ヶ崎横穴群」と書き直している。法量は口径12.7㎝底径9.4㎝高さ10.9㎝。本資料の記載法量と２～３㎜の違いはあるがこれは計測位置による誤差であろう。滑らかな半球型の坏部をもつ無蓋タイプの短脚高坏で、口唇部内側には明瞭な面を有する。器壁はやや明るい灰色に発色し焼成は良好。口縁部１/３と脚部端を少々欠損するが、石膏補修・彩色が施されている。東海地方所産（おそらく湖西窯）の搬入品と考えられ、年代は７世紀第４四半期～８世紀初頭に比定できる。なお、脚部内底面には「大正12年 浦賀町 鴨居」の墨書注記が残されていた（**写真３**）。

［掲載図書］

本資料と断定できる須恵器高坏を掲載する図書はない。

［小結］

「腰越の社内」「鴨居のお宮」を特定することができず疑問も残るが、須恵器高坏に限れば、器形・法量からみて県立歴史博物館に収蔵されるものと同一個体である可能性は高い。1965年の収蔵時に「鳥ヶ崎横穴群」となった経緯は不明だが、赤星氏が大正13（1924）年に調査した鳥ヶ崎Ａ横穴の出土遺物スケッチ（赤星1925）のなかに、器形の近似する無蓋半球型坏部須恵器高坏をみることができる（**第６図**右上）。しかしながら「高さ四寸一分、径五寸のものと、高さ三寸九分、径四寸九分のものと二個出た」との記述からこれらを口径÷器高の比でみると約1.22と約1.26になるのに対して、本資料（収蔵遺物）は約1.12（1.17）となり法量に差異が認められる。また「大正12年 浦賀町 鴨居」の墨書注記は赤星氏の筆跡と思われるものの、こちらも調査の前年にあたり時間的な矛盾が生じる。大正11（1922）年の鳥ヶ崎横穴群の発見から調査までの間に採集したものである可能性なども想定できるが、本資料が鳥ヶ崎横穴から出土したものであるという

確証には至らなかった。

なお、本調査には、千葉毅氏（神奈川県立歴史博物館）、稲村繁氏（横須賀市自然・人文博物館）のご教示、ご協力を賜りました。文末でありますが御礼を申し上げます。（長澤）

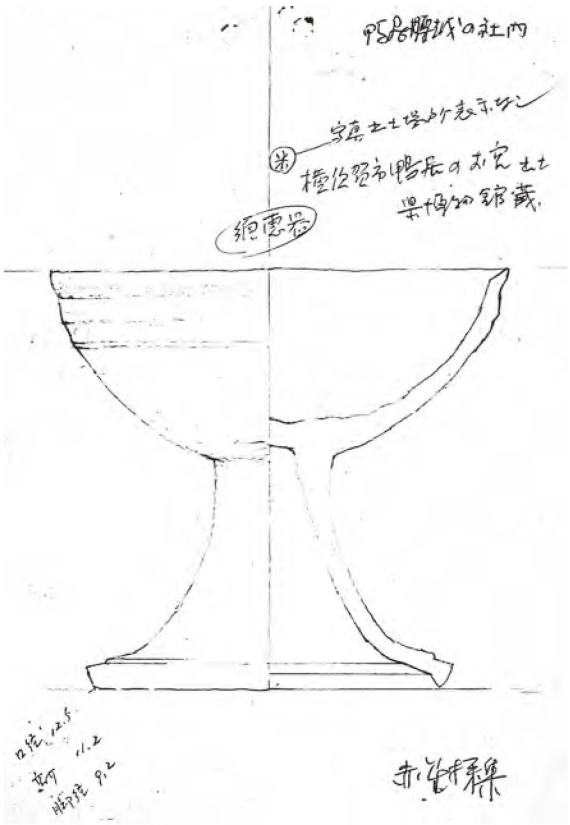
引用・参考文献

赤星直忠 1925「相州鴨居の横穴（一）」『考古學雜誌』第15巻第８号　日本考古学会

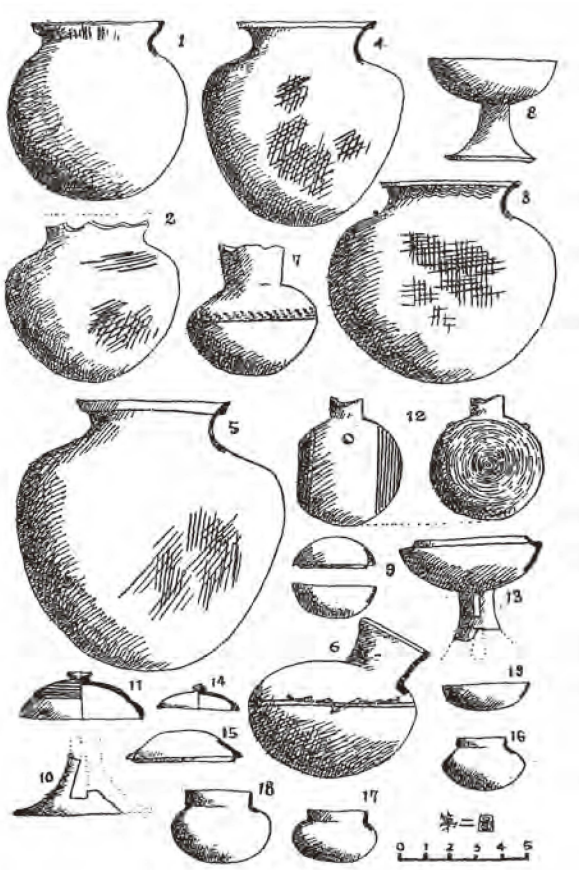
赤星直忠 1955「神奈川県鴨居の八幡社貝塚」『日本考古学年報３（昭和25年度）』日本考古学協会

尾野善裕・小林久彦・鈴木敏則・贄 元洋 1999『第４回三河考古合同研究会資料　古墳時代の猿投窯と湖西窯分類・編年・西暦年代の再検討－』三河考古刊行会

鈴木敏則 2001「湖西窯古墳時代須恵器編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅 第５分冊 補遺・論考編』



第５図　赤星ノート資料 須恵器高坏スケッチ（縮尺1/2）



第６図　鳥ヶ崎Ａ横穴の出土遺物（赤星1925より転載）

写真２　神奈川県立歴史博物館蔵 須恵器高坏（筆者撮影）

写真３　同左 脚部内面に書き込まれた「大正十二年 浦賀町 鴨居」の墨書注記（筆者撮影）

年報番号03111　横須賀市　佐原城山遺跡　横須賀市佐原３丁目

１．赤星ノートの内容

［調査（踏査）年月］

1972（昭和47）年９月23日

1977（昭和52）年11月14日

［資料保管場所］

赤星直忠博士文化財資料館（横須賀市長坂２丁目11番11号　宇内建設株式会社ビル３階）

［資料概略］

資料が収められている封筒は、京都府「西陣たより社（現・西陣織工業組合）」の機関誌「西陣グラフ」（2015年現在休刊）の発送用封筒で、神奈川県立博物館に宛てられたものである（**写真４**）。料金別納郵便のため、封筒が使用された年月日は不明である。

封筒に納められた資料は佐原城山遺跡の調査や遺物に関するもので複数に分かれている。

写真４　赤星ノート封筒

資料①：1972（昭和47）年に行われた佐原城山遺跡を含む周辺遺跡の踏査メモと、その際採取された磨製石斧の簡略な実測図および写真である。メモと石斧実測図はＢ５サイズの用紙に書かれているが、全てコピーであり、原本は所在不明である。

資料②：1976（昭和51）年に行われた佐原城山遺跡発掘調査の野帳である。Ｂ５サイズの反故紙17枚の短辺をホチキス止めしたもので、元々は県内の個人や寺社、学校などが所蔵する文化財を集成したリスト表だったようであるが、その裏面を利用している。13枚目までに調査時のメモや略図、出土遺物の簡易な実測図が記載されている。

資料③：上記の佐原城山遺跡発掘調査で出土した弥生土器の実測図と拓本、および土師器の実測図である。Ａ3用紙にほぼ原寸で描かれているが、コピーであり原図は所在不明である。

資料④：「神奈川県内出土遺物所蔵者調査表」および「神奈川県内主要遺物遺物調査表」と題された２枚のＢ５用紙であり、**資料③**の出土遺物について記載されている。

資料⑤：Ｂ５サイズの厚紙に貼られた佐原城山遺跡の遠景写真である。

資料⑥：1976（昭和51）年の発掘調査を伝える同年３月24日付神奈川新聞の切り抜きである。Ｂ5サイズの厚紙に記事が貼付されている。

２．記載資料の整理

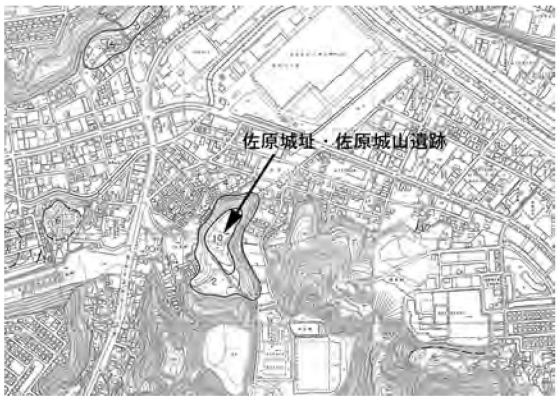
［遺跡・遺物概要］

佐原城址および佐原城山遺跡（第７図）

佐原城址は、横須賀市佐原３丁目1221番地、久里浜港に注ぐ平作川の支流佐原川（岩戸川）右岸の舌状台地に位置する。鎌倉時代の御家人三浦氏の一門で、源頼朝に仕えて治承・寿永の乱で武功を挙げた佐原十郎

義連（？～1192 ？）の居城と伝わる。当地は横浜横須賀道路建設などで土地の変形が著しく、城に伴う遺構は確認しにくいが、周辺には「殿入」など、城を思わせる地名が残る（横須賀考古学会 2009）。

佐原城址に指定されている台地は同時に佐原城山遺跡として弥生～古墳時代の遺物包蔵地として認知されており、1976（昭和51）年3月、台地中央の平坦面（通称：台畑）に東京電力の送電鉄塔が建設されることとなり、鉄塔建設予定地で佐原城山遺跡調査団による事前の発掘調査が行われた。**資料②～⑥**はそれに関連するものである。



第７図　遺跡位置図（Ｓ＝1/20000）横須賀市教委1993より

資料①：佐原城山遺跡踏査メモ、遺物写真・実測図（第８図）

資料①の記入者は竹沢義氏であり、おそらく踏査後に記録したメモをコピーし、赤星氏に渡したものと考えられる。

1972（昭和47）年９月23日正午頃から18時半頃まで、佐原城山遺跡（佐原城址）から茅山貝塚を経て八幡社までを踏査し、各所で遺物を採取したことが記録されている。

佐原城山遺跡での記載は、石斧が採取されたことに重点が置かれているが、「土師器　須恵器　細片」が採取されたことにも触れられている。その後、八幡社で「ハニワ片」を採取したとの記載があり、赤鉛筆でその部分に囲みがされている。これらの記録から、この八幡社とは現在の久里浜２丁目17に所在し、境内に八幡神社古墳群が存在する八幡神社であることがわかる。

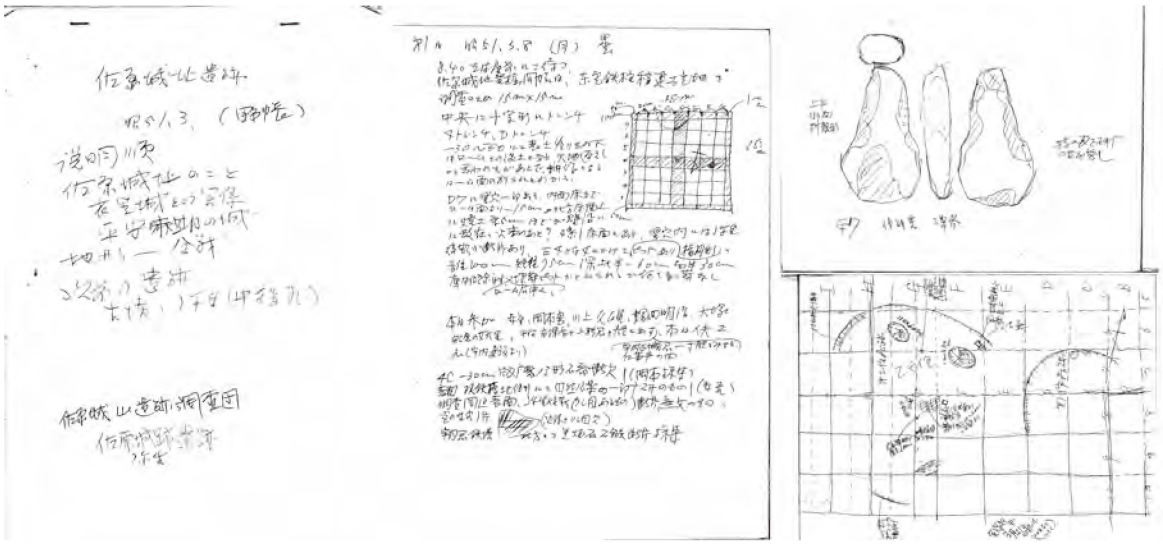
なお本資料はコピーされた同じものが２部あり、ホチキスで１つに留められているが、１部目の左上にだけ「宇内さん」と書かれ、後から二重線で消していることから、本来、1部は宇内氏に贈られるはずだったものが、何らかの理由で手元に残ったのであろうか。

資料②：佐原城山遺跡調査野帳（第10図）

1976年３月８日（日）より開始された佐原城山遺跡発掘調査の記録であり、赤星氏本人が現場で使用していたものと考えられる。

３月８日から13日（土）までの調査進捗や、調査区平面略図が描かれ、弥生時代の住居（１・２号住居）についての調査状況が詳細に残されている。しかし、14日～20日まで赤星氏は不在であったらしく記録がなく、また21日（日）に現場へ顔を出して以降の記述も存在しないため、後述の**資料③**の土師器９点が出土した５・６号竪穴住居についての調査状況は把握できない。

第８図　資料①踏査記録類

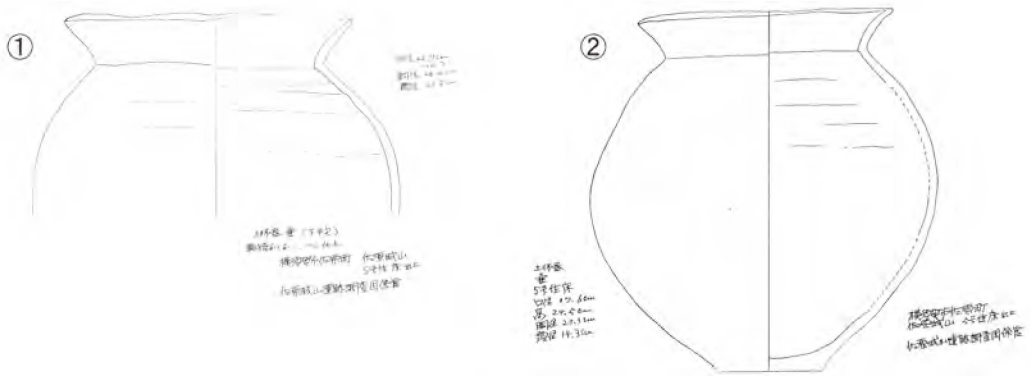


第９図　資料②佐原城山遺跡発掘調査野帳（一部）

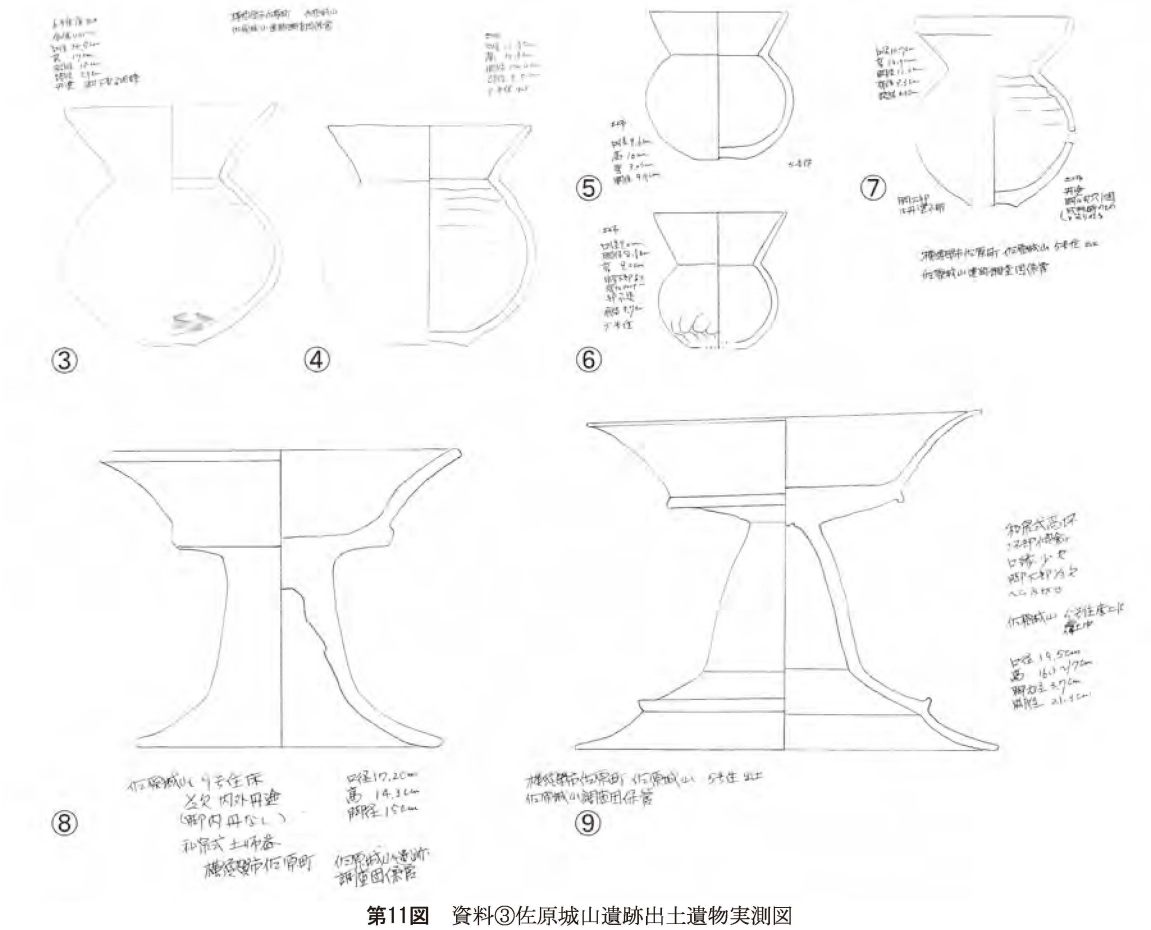
資料③：弥生土器拓本・実測図、土師器実測図（第10・11図）

弥生土器、土師器共に**資料②**の1976年の調査で出土した遺物である。弥生土器については割愛するが、壺形土器２点の実測図の他、破片の拓本数点が貼付されており、いずれも中期後半の宮ノ台式に相当する。この内の１点は『神奈川県史　資料編20　考古資料』に図版468として掲載されている資料である。

土師器の実測図は広口壺（原紙に「壺」と記載。現在は「甕」と呼ばれるもの）２点、小型坩４点、土師器ハソウ１点、高坏２点である。広口壺２点（①②）はいずれも５号住居床面出土とされ、短頸でクビレの屈曲が強い「く」の字を呈し、球形胴である。調整はほとんど記載されていない。「和泉式」とあるように、今日では古墳時代中期の資料と考えられる。小型坩は、口縁のやや長い③が６号住居出土である以外は５号住居出土である。⑦は胴部中央に穿孔されており、形態は極めて単純化されているが、おそらく須恵器ハソウを模しているものと思われる。中期前半の遺物と見て良い。⑨はいわゆる有段高坏である。受部中段及び脚部裾に段状の意匠を持ち、脚部幅は受部より大きい。神奈川県内の出土例については山口正憲氏による検討がなされており（山口 2000)、本資料は山口氏の言うⅢＥ式に相当する。埼玉県北部地域に出土地域がかなり集中するものの、神奈川県内西部や静岡県、長野県にも分布し出土例は比較的多い。



第10図　資料③佐原城山遺跡出土遺物実測図



第11図　資料③佐原城山遺跡出土遺物実測図

これらの資料は「床直上」との記載があり、極めて一括性の高い資料である。小型丸底坩が残存し胴部の丸い壺が伴うことから古墳時代中期前半にあたると考えられる（長谷川 1998）。

資料④「神奈川県内出土遺物所蔵者調査表」および「神奈川県内主要遺物遺物調査表」（第12図）

両用紙左上に「県史考古資料」とあるので、『神奈川県史　資料編20　考古資料』を編纂するにあたり掲載候補を集めたリストと見られる。**資料③**の遺物を記載しているが、これら古墳時代遺物はいずれも『県史』や『横須賀市史』には掲載されていない。

第12図　資料④出土遺跡調査表

資料⑤佐原城山遺跡遠景写真（写真５）

台紙右下に風景略図と注記がなされている。これによると撮影年月日は「昭和52（1977）年10月10日」で「佐原御霊社から見た佐原城山」として手前から奥へ向かって「聖徳院のある西側丘」「城山」「東側の丘」と３つの舌状台地を記載している。佐原３丁目の御霊神社から東方を撮影したとわかるが、現在は横浜横須賀道路が画面中央を横切り台地を大きく改変しており、当時の面影を把握しづらい（**写真５下段**）。

資料⑥３月24日付　神奈川新聞切抜（第13図）

写真５　資料⑤遺跡遠景（上：資料　中：拡大
下：ほぼ同地点から見た現在の様子）

第13図　資料⑥神奈川新聞記事

弥生中期の住居と遺物の出土を中心に報じているが、「古墳時代前期の五領式土師器一点が完全な形で見つかるなど、思わぬ収穫があった」との記載がある。**資料③**の一部を前期の遺物と誤認してしまったものなのか、これ以外に前期遺物の出土があったのかは不明だが、前者の可能性が高い。

［小結］

本資料、特に**資料②③**は、1976年の佐原城山遺跡発掘調査の様子を記録した第１次資料であり、実測図も未公表であるため、大変貴重なものを含む。また現在**資料③**の遺物は赤星忠直博士文化財資料館にすべて展示され見学可能である（**写真６**）。今後の活用が期待される良好な資料といえよう。

本稿執筆にあたり、稲村繁氏（横須賀市自然・人文博物館）、宇内正城氏（宇内建設株式会社）、齊藤彦司（けんじ）氏（赤星忠直博士文化財資料館）、釼持輝久氏（同資料館）より、多大なご助勢を賜りました。心より御礼申し上げます。

（長友）

遺構・遺物概要の引用・参考文献

神奈川県県民部県史編纂室 1979『神奈川県史資料編20考古資料』
長谷川厚 1998「古墳時代中期土器分析への一視点」『神奈川考古』第34号　神奈川考古同人会
山口正憲 2000「古墳時代中期の有段高坏について」『青山考古』第17号　青山考古学会
横須賀市 2010『新横須賀市史 別編 考古』
横須賀考古学会 2009『横須賀考古学事典』
横須賀市教育委員会 1993『埋蔵文化財分布地図・地名表』

写真６　資料③遺物の保管状況
（赤星直忠博士文化財資料館所蔵）